

Drag & Drop UpTeX



1. Drag & Drop UpTeXについて

Drag & Drop UpTeX(UpTeX.app)は、10.14 Mojave以降のmacOSに、なるべくコンパクトな日本語TeX処理系を簡単に導入するための統合パッケージです。任意の場所にDrag & Dropでインストールでき、最低限の操作で必要な設定が完了します。またアプリケーションはTeXソースをエディタで編集・タイプセットし結果をPDFビューワで表示する統合環境機能と、内蔵TeX環境のアップデートやパッケージの追加・削除などを行う管理機能を備えています。例えるならTeXShop・TeX Live Utilityそれぞれの簡略版と、TeX Liveの軽量版(scheme-small+collection-langjapanese+ α)を一体化したようなものです。20200515版から、マルチユーザー環境での利用と、年次更新などによるUpTeX.app差し替え時の設定・環境引き継ぎについて、大幅に改善を施した新版になりました。また20210403版からはUpTeX.app/TeX Liveコマンド群とも、Intel/Apple Silicon双方のCPUでネイティブ動作するユニバーサル版になりました。なおこのReadMeファイルは、UpTeX.appの「ヘルプ」メニューの「UpTeX ReadMe」からも開くことができます。

2.管理者・通常ユーザー・所有権

macOSのマルチユーザー環境ではユーザーは管理者権限のある者と、それを持たない通常ユーザーとに大別されます。アプリケーション・フォルダなど共用部分に対してアプリケーションのインストール／アンインストールなどをできるのは前者だけです。これに対して後者は自分のホームエリアの改変しか認められず、アプリケーション・フォルダにインストールされたアプリケーションについては、その使用のみが許されます。そしてアプリケーションの外観やエディタのデフォルトフォントなどユーザーがそれぞれに変えることのできる設定は、管理者・通常のユーザー問わず、それぞれのホーム内のLibrary/Preferencesフォルダに作成される環境設定ファイルに記録することで、ユーザーごとに諸設定を別にすることを実現しています。

ただし管理者ユーザーであっても、別の管理者ユーザーがインストールしたアプリケーションを削除するような場合には、まずユーザー名とパスワードの入力を求めるパネルが開き、管理者であることを証明する手続きを経ることになります。これはmacOSでは元のファイルのパーミッションがどんなものであっても、たとえばそれをディスクイメージからコピーした際には、その所有権は原則としてそのユーザーだけのものになってしまうからです。

UpTeX.appはアプリケーション・バンドル内にTeX環境を内蔵することでDrag & Dropによる全環境のインストールを実現してきました。しかしそのことは、TeX環境のアップデートやパッケージの追加、それに関わる設定などの、TeX環境内のファイルの変更を要する操作は、所有権のあるユーザーにしかできないことを意味しています。

従来のUpTeX.appでは「自分だけが使う自分のMacにインストールする」ことを想定しており、その場合はユーザーは当然に管理者なのでこの問題は顕在化しません。しかしマルチユーザー環境で通常ユーザーもUpTeX.appを利用している場合、たとえばTeXアップデートを実行はできるのに、UpTeX.app内への書き込み権限がないため処理に失敗するということが起こっていました。また、内蔵TeX環境についての設定変更の結果は、それを実行したユーザーの環境設定ファイルに記録されるものの、環境設定ファイルの側の記録に内蔵TeX環境の設定を追従させる機能は持たせていませんでした。このためたとえば、UpTeX.appの入れ替え直後にはdvipdfmxのフォントが、前のUpTeX.appが環境設定ファイルに残した記録に追従する「環境設定」パネルでの表示と、実際の内蔵TeX環境とのものでズレるといったことが起こっていました。

そこで20200515版から、**初回起動・パッケージ管理など所有権を要する操作では所有者以外の操作をUpTeX.appの側で抑止**するようにしました。また内蔵TeX環境関連の設定記録はUpTeX.app内部に保持させる一方、dvipdfmxのフォント設定も含めてユーザーごとの設定はユーザーエリアに持たせるという切り分けを行いました。その結果、マルチユーザー環境での使用を改善するとともに、UpTeX.appの入れ替え時にもユーザーごとの設定を引き継げるようになりました。そのためにPreferences内の環境設定ファイルに加え、ユーザーのLibrary直下に**UpTeX**というフォルダが用意されます。そのなかのtexliveフォルダに、dvipdfmxのフォント設定など内蔵TeX環境が作成するユーザーごとのファイルが格納されるtexmf-var/texmf-configフォルダおよび、ユーザー自身による独自ファイル追加エリアとなるtexmfがまとめられています。内蔵TeX環境のtexmf-localなどはUpTeX.app自身を通して管理されるので、独自ファイルを追加するなどの内部の**直接の改変操作は避けてください**。

なお通常ユーザーであっても自分のホームエリア内にUpTeX.appをインストールした場合には、所有権があることになるのでフル操作が可能です。

3.使い方

(1) インストールと起動時処理

まずUpTeX.appをアプリケーション・フォルダなどの任意の場所にコピーします。ただし開発者がAppleに有償での登録をしていないアプリケーションは、ダブルクリックしても起動できずにゴミ箱に捨てることを促されてしまいます。そこで続いてUpTeX.appをファイндаで選択し、右クリック (ctl+クリック/二本指クリック) が出るメニューから「開く」を選び、表示されたパネルの「開く」ボタンをクリックして起動します。そうして初回起動ができれば、次からは普通にダブルクリックで起動できます。

ただしmacOS 15.x Sequoiaでは無署名アプリケーションのチェックが厳しくなったため、システム環境設定→プライバシーとセキュリティのセキュリティ項目にて、ブロックされたアプリケーションの「このまま開く」ボタンにて起動を許可する必要があります。

初回起動時にはコンソールが立ち上がり、今後の利用に必要な様々な設定が行われます。ただしそこには内蔵TeX環境の最新状態への更新などインターネット接続が必要なものが含まれます。

なお、ウィンドウ下側のテキスト入力欄は、実行しているコマンドから返答の入力を求められた場合のためのものです。たとえばTeXソースの処理中にスタイルファイルが見つからないと、そのパスの入力を求められたりしますが、そのようなときに使います。リターンキーで入力確定です。「強制終了」ボタンは、進行中の処理を強制終了します。またコンソールは一度起動するとUpTeX.appを終了するまで閉じられません。これは実行中の処理もコンソールのクローズとともに中断してしまうのを防ぐためです。

またオーナー・ユーザー以外による初回起動は、右図のようにコンソールにモーダルパネルがプルダウンして抑止されます。

初回起動時処理

dvipdfmx用フォントの環境構築

システムフォントをスキャンして、内蔵TeX環境内にdvipdfmxに必要なフォントのシンボリックリンクが適切に作成されます。これは `cjk-gs-integrate --output=test --link-texmf -cleanup` と `cjk-gs-integrate-macos --output=test -link-texmf` を実行の後、不要となった中間生成ファイル類を削除しています。なおmacOSは大量のフォントを内蔵しているため、この処理には時間がかかります。



◦内蔵TeX環境のアップデート（要ネット接続）

`tlmgr update --self, tlmgr update --all` を実行して、内蔵TeX環境を最新の状態にアップデートします。

以前のUpTeX.appからのユーザーによるパッケージ加・除の継承（要ネット接続）

以前のUpTeX.appでユーザー自身が行った内蔵TeX環境のパッケージ加・除記録が残っている場合、それを引き継いでパッケージを加・除します（後述）。一連の処理の開始当初に引き継ぎを行うか否かを問うモーダルパネルがコンソールからプルダウンします。「OK」を選べばTeX環境アップデートに続いて引き継ぎ処理（パッケージの加・除）が行われ、「Cancel」を選べば処理を飛ばします。なお、環境の引き継ぎは後に「パッケージ管理」機能でも行うことができます。

毎回の起動時処理

TeXコマンド支援機能用ファイルの設定

UpTeX.appのTeXソース編集エディタには、TeXShopライクなユーザーによる編集可能なTeXコマンド入力支援機能が備わっています（後述）。その設定ファイル`command.plist`は、各ユーザーのLibrary/UpTeXフォルダに格納されます。このフォルダや`command.plist`が存在しなければそれを作成します。旧版ではこのファイルは`com.dokuroryokan.UpTeX.command.plist`という名称でLibrary/Preferences直下に置かれていました。それが残っていれば、UpTeXフォルダ内に`command.plist`にリネームしつつ移動させます。この処理はユーザーによる設定ファイル削除も想定して、初回だけでなく毎回の起動時に行うようになっています。

内蔵TeX環境のアップデート（要ネット接続）

「パッケージ管理」ウィンドウ（後述）で「起動時アップデート」がオンになっており、かつオーナー・ユーザーによる起動の場合は、毎回の起動時にも`tlmgr update --self, tlmgr update --all` を実行して内蔵TeX環境を最新の状態にアップデートします。

(2) 環境設定パネル

dvipdfmxのフォント

dvipdfmxで使うフォントの設定をします。コンソールに処理が渡されて、`kanji-config-updmap-users --jis2004` を実行します（IPA/IPAexはjis2004字形しか持たないので、`-jis2004` オプションなしで実行）。その結果生成される設定ファイルは前述のように、各ユーザーのLibrary/UpTeX/texlive内に保存されます。またヒラギノN/ヒラギノや凸版文久を選んだ場合、OSのバージョンを判定して自動的に適切な設定が選ばれます。なおCatalinaで游フォントを選ぶなど、そのバージョンのOSが持っていないフォントを選んだ場合には、“このフォントはこのバージョンのOSでは使えません！”というメッセージがコンソールに表示され、処理は行われません。また小塚フォントを、それが無い環境で選んだ場合などには代わりに他の適当なフォントが動的に選ばれます。まだユーザーによる設定がされていない間は、`kanji-config-updmap-sys` コマンドであらかじめ内蔵TeX環境に設定されている原ノ味フォントが表示されて使われます。



texbinパスをクリップボードにコピー

内蔵TeX環境のtexbinパスをクリップボードにコピーします。`.bash_profile`などでのPATHの設定や、TeXShopなど他のアプリケーションでの設定に用います。UpTeX.appをアプリケーション・フォルダにインストールした場合は、

```
/Applications/UpTeX.app/Contents/Resources/TEX/texbin
```

となります。

内蔵エディタの初期設定フォント

TeXソースファイル編集用の内蔵エディタの表示フォントを設定します。「変更」ボタンをクリックするとシステム標準のフォントパネルが開くので、それで設定します。この設定は各ユーザーの環境設定ファイルに保持されます。なおシステム標準のフォントパネルはUpTeX.appではパネルを呼び出した用途と紐付きます。よってたとえば環境設定でフォントパネルを開いたまま、後述するテキストファイルごとの一時表示フォントを変更するような場合には、改めてテキストウィンドウのフォントパネル表示ボタンを押して、紐付けをし直します。

パッケージの管理 (要ネット接続)

ボタンをクリックすると「パッケージ管理」ウィンドウ (後述) が起動します。このウィンドウに表示されるTeX Liveの全パッケージ一覧の取得などにはネット上のリポジトリへの接続が必要です。またオーナー・ユーザーでない場合は、環境設定パネルにモーダルパネルがプルダウンして操作を抑止されます。

フォントの再サーチ・リンク

初回起動時に自動で行われるシステムフォントのサーチとシンボリックリンクの作成を手動で再実行します。UpTeX.appがインストールされた環境を、たとえばSierraからHigh Sierra以上に上書きアップデートしたような場合や、TeXで使用可能なフォントをシステムにインストールした場合などに利用します。オーナー・ユーザーでない場合は、環境設定パネルにモーダルパネルがプルダウンして操作を抑止されます。

PDFの開閉をTEXファイルと連動させる

チェックボックスがオンになっていると、内蔵エディタでTeXソースファイルを開く際、同じフォルダにソースと対応するPDFがあればセットで開きます。また、TeXソースファイルを閉じる際にはPDFも閉じます。この設定は各ユーザーの環境設定ファイルに保持されます。デフォルトではオフになっています。

レトロ風コンソール

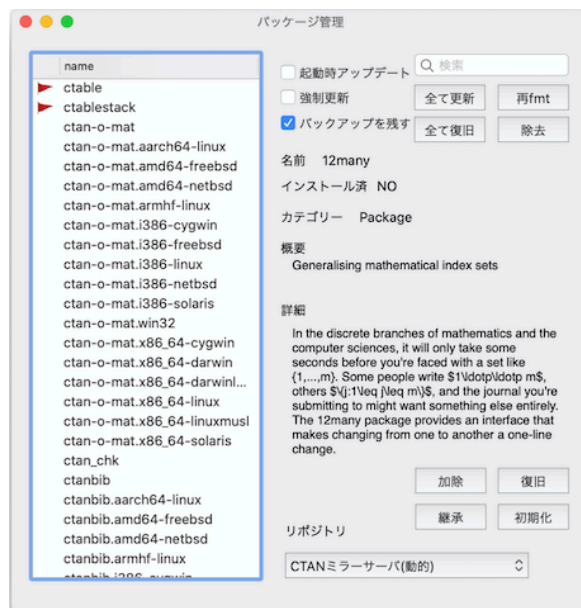
チェックボックスがオンになっていると、コンソールが昔のモノクロモニタのような黒バック・緑文字のデザインになります。この設定は各ユーザーの環境設定ファイルに保持されます。デフォルトではオフになっています。

(3)パッケージ管理ウィンドウ (要ネット接続)

a.パッケージ管理全体に関わるもの

TeX Liveのtlmgr (TeX Live Manager) は、全パッケージの一覧取得やアップデート、追加/削除などの機能をもつ管理コマンドです。

「パッケージ管理」ウィンドウは、その多様な機能のうち基本的なものをGUIで容易に利用できるようにするフロントエンドです。環境設定パネルからパッケージ管理ウィンドウを立ち上げると、TeX Liveのリポジトリから全パッケージの情報を取得したうえでウィンドウを表示します。このプロセスはパッケージ数が膨大なため、**若干の時間がかかります**。なお、インストール済パッケージには赤い“旗”が表示されます。



「起動時アップデート」チェックボックス

オンになっており、かつオーナー・ユーザーによる起動の場合、UpTeX.appを起動するたびに、まずコンソールが立ちあがって内蔵TeX環境のアップデートを自動で行います。デフォルトではオフになっています。

「全て更新」ボタン

インストールされている全パッケージについてアップデートを行います。処理過程はコンソールに表示されます。tlmgr update --selfと、tlmgr update --allを実行します。

「強制更新」チェックボックス

tlmgrでのアップデートでは、取得すべきファイルが置かれているミラーサイトで当該ファイルの更新中であつた場合などにファイル取得に失敗して、そのパッケージが削除され、以降

`skipping forcibly removed package <package_name>`

というメッセージが出るようになります。その場合、`-reinstall-forcibly-removed`オプションをつけて実行することで当該パッケージを回復できます。「強制更新」はそのためのもので、チェックボックスがオンの場合こちらが実行されます。デフォルトではオフになっています。なお初回・毎回の起動時の実行はオプションなしで固定です。

「バックアップを残す」チェックボックス

オンになっているとアップデートの際、アップデートで問題が生じた場合に前のバージョンに復旧するためのバックアップを1回分残します。また削除したパッケージもバックアップされます。デフォルトではオンになっていますが、その蓄積はUpTeX.appのサイズを大きくします。

「全て復旧」ボタン

全パッケージについて、バックアップが残っている場合には、インストール済パッケージならばバックアップのバージョンに復旧し、かつてインストールされていたが削除したパッケージならば復活します。コンソールに処理が渡されると`tlmgr`が本当に復旧するか問うてくるので、テキスト入力欄で `y` を入力して続行してください。

「除去」ボタン

全バックアップ・ファイルを削除します。「バックアップを残す」を解除して実行します。

「再fmt」ボタン

全復旧・個別復旧を問わず、復旧後には`platex/uplatex`のフォーマットファイルの再作成が必要になることがあります。それをこのボタンで実行します。

「リポジトリ」プルダウンメニュー

ファイルのダウンロードに用いるリポジトリを設定します。デフォルトは近くのミラーサイトを動的に探す「CTANミラーサーバ(動的)」になっています。

b.個別のパッケージ管理に関わるもの

「加除」ボタン

リストで選択されているパッケージについて、未導入であればインストールし、導入済であればアンインストールします。変更結果は即座にリストに反映します。ただしインクリメンタル・サーチをしていた場合その絞り込み結果はリセットされ、あらためて全リストが表示されます。

なお`UpTeX.app`の初期パッケージの多くは、日本語関係パッケージをまとめた`collection-langjapanese`のような、`collection`と呼ばれるパッケージ群としてインストールされたものです。このような`collection`の一部のパッケージを個別にアンインストールしようとしても、`tlmgr`は`collection`の一部である旨を警告してアンインストールできません。そのアンインストールには、リストから上位集合である`collection`を選択しなければなりません。そして`collection`と個々のパッケージとの関係は、パッケージの「概要」や「詳細」の説明では明らかでないこともあります。初期パッケージはほぼ必要最小限のものであり、アンインストールしようとしないう方がよいでしょう。

「復旧」ボタン

リストで選択されているパッケージについて、バックアップが残っている場合には、インストール済パッケージならばバックアップのバージョンに復旧し、かつてインストールされていたが削除したパッケージならば復活します。`tlmgr`が本当に復旧するかユーザーに問うてくるので、テキスト入力欄で `y` を入力して処理を続行してください。

c.環境引き継ぎに関わるもの

「継承」ボタン

以前のUpTeX.appが残したパッケージ加除記録にもとづき、その内蔵TeX環境の加除状況を引き継ぎます。誤操作防止のため本当に実行するか否かの旨、まずモーダルパネルが表示されます。

「OK」をクリックすれば処理を行い、「Cancel」でキャンセルされます。また加除記録が残っていない場合にはその旨、モーダルパネルが表示されるので、「OK」をクリックして処理を終えてください。

もしすでに現在のUpTeX.appでパッケージの加除が行われていれば、それをリセットして以前の状況を引き継ぎます。なお処理終了時に全パッケージのリスト表示も更新するため、**処理には時間がかかります。**

「初期化」ボタン

ユーザーが行った内蔵TeXのパッケージ加除をリセットして、初期状態に戻します。誤操作防止のため本当に実行するか否かの旨、まずモーダルパネルが表示されます。「OK」をクリックすれば処理を行い、「Cancel」でキャンセルされます。そもそも加除が行われていない、ないし加除のくり返しの結果として初期状態が再現されている場合には、加除記録はありません。その場合はその旨、モーダルパネルが表示されるので、「OK」をクリックして処理を終えてください。なお処理終了時に全パッケージのリスト表示も更新するため、**処理には時間がかかります。**

また初回起動時の引き継ぎ・「継承」・「初期化」とも追加・復元に失敗したパッケージがあった場合にはパッケージ名がモーダルパネルに表示されます。既にリポジトリから削除されている場合や、リポジトリでの更新作業中などが該当しますのでログを読んで判断し、後者の場合は「強制更新」で回復してください。

【加除記録・継承機能について】

UpTeX.appでは内蔵TeX環境のパッケージ構成が変化し得る「加除」「継承」「初期化」「復旧」「すべて復旧」機能を使った時に、内蔵TeX環境の初期状態に対する加・除状況をUpTeX.app内部のファイルに記録し、必要に応じてその内容を**オーナー・ユーザーのLibrary/UpTeX/PKGフォルダ**内に出力します。新たに加・除が生じた場合はUpTeX.app終了時にpkg.plistというファイル名で記録を出力。その際、以前のpkg.plistはpkg_2020-05-02T18/50/56Z.plistのような日時付のファイル名でバックアップされていきます。またそもそも加・除が行われていない／加・除を繰り返した結果初期状態に戻った場合、pkg.plistは存在なくなります。

一方、「継承」「初期化」でそれまでの加・除が一挙に破棄された際には、破棄前の状態をabolished_pkg_2020-05-02T18/50/56Z.plistのようなファイル名で出力します。

初回起動時には、pkg.plistの存在を確認するとその内容を読み込んで引き継ぎ処理が行われます。またそれまでのpkg.plistはprev_pkg.plistにリネーム。以前のprev_pkg.plistが残っていた場合にはprev_pkg_2020-05-02T18/50/56Z.plistのようなファイル名でバックアップしていきます。「パッケージ管理」ウィンドウからの「継承」では、このprev_pkg.plistを読み込んでいます。

このように各種バックアップファイルは接頭辞で性格の区別がつけられています。よってファイル名を初回起動時の場合はpkg.plist、「継承」機能の場合はprev_pkg.plistにリネームして用意すれば、任意のバックアップファイルの情報による環境構築が可能です。

ただしtlmgrは膨大・複雑なTeX Liveの依存関係などを完全には制御できていません。もし不都合が生じた場合には、個別の加・除によって補足してください。また、この加・除記録はあくまでUpTeX.appによる加・除を記録していくものなので、ターミナルからのtlmgr install実行などによるUpTeX.app外からの加・除まで捕捉・記録することはできません。

(4) 内蔵エディタ

文字コード・改行コード判別機能とTeXコマンドカラーリング機能などをもったテキストエディタです。操作のためのプルダウンメニューとボタンはウィンドウ上部に集中しています。

基本的な機能

いちばん左には、開いたファイルの文字コード・改行コードを判別して表示します。また、このプルダウンメニューを操作して保存の際のコード変更をします。

「command」メニューの説明は後として、次のプルダウンメニューではファイルの拡張子から処理実行の際のコマンドを判別・表示します。`.tex`なら内容判別のうえで`uplatex/`

`platex`のどちらか。`.aux`なら`upbibtex`、`.idx`なら`upmendex`とみなします。それ以外であれば`other`として、コマンド実行ボタンを押しても何の処理もしません。判別に失敗している場合や必要に応じて、プルダウンメニューからコマンドを選びなおしてください。

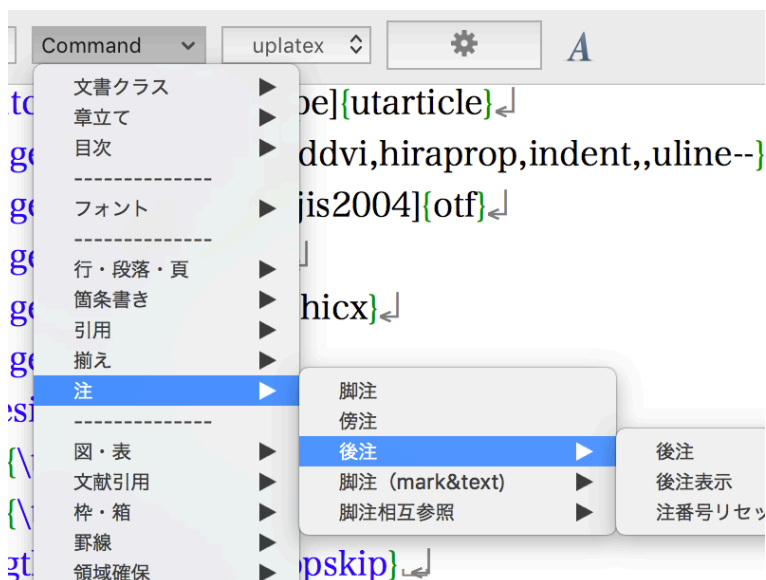
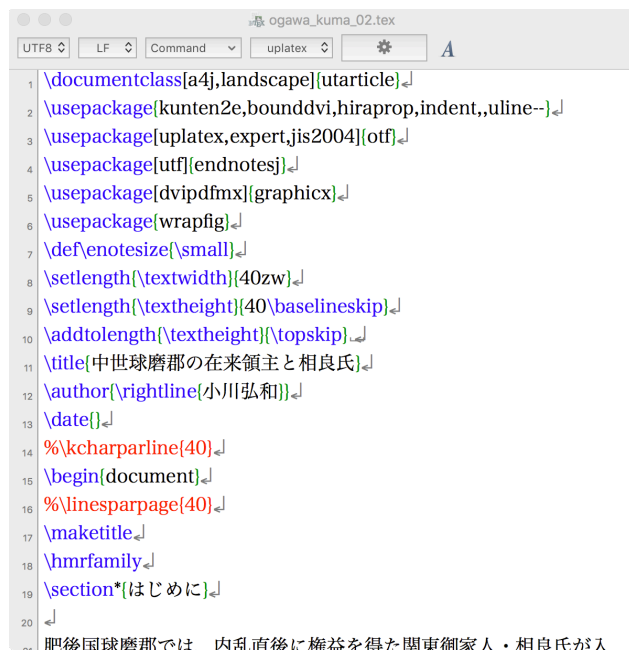
その右側のボタンは、「command」メニューでの選択にしたがって処理コマンドを実行するためのボタンです。この機能にはキーボード・ショートカットとして“`⌘+Y`”を割り当ててあります。処理過程はコンソールに表示されます。必要に応じてテキスト入力欄で応答してください。`uplatex/platex`の実行では、`dvipdfmx`まで連続実行したうえで、生成されたPDFを内蔵PDFビューワで開き表示します。

「A」ボタンはフォントパネルを開いて、当該ファイルの表示フォントを一時的に変更します。この変更は一時的なものなので記憶はされず、同じファイルを改めて開いたときには「環境設定」の初期設定フォントで表示されます。

コマンド入力支援機能

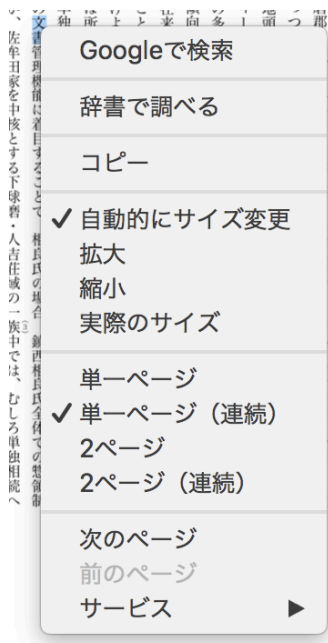
「コマンド」プルダウンメニューはTeXShopの「マクロ」プルダウンメニューと類似の機能で、デフォルトでは初期のTeXShopに搭載されていた拙作のものと同様のコマンド一覧を提供するものになっています。

しかしこの種の機能にはカスタマイズの余地が必要ですからTeXShopのもの仕様を踏襲してあります。具



体的にはコマンド一覧のプロパティリストをアプリケーションが読み込むようになっており、それは前述のように`command.plist`というファイル名で各ユーザーの `Library/UpTeX` フォルダに存在し、`TeXShop`のマクロエディタや各種プロパティリスト編集ソフトで編集できます。

(5) 内蔵PDFビューワ

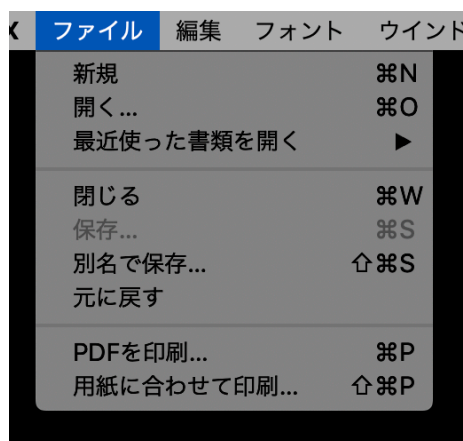


タイプセット結果の表示に特化した、シンプルなPDFビューワです。タイプセットのたびに、表示ページをほぼ維持しつつ表示内容を更新します。ページの表示方式の変更などは右図のように、画面の右クリック (`ctl+クリック/二本指クリック`) で表示されるメニューで行います。

ところで`latex/uplatex`では`bounddvi.sty`などを使って`dvipdfmx`が生成するPDFの用紙を任意のサイズにできます。しかし、たとえばB4サイズで作成したPDFを、ひとまずA4サイズにスケールダウンして印刷したいようなこともあり得るでしょう。その場合には「用紙に合わせて印刷…」 (`Shift+⌘+P`) を選ぶと、「用紙サイズ」で選ばれた用紙に収まるよう、自動で適当なサイズにスケールダウンされて印刷が実行されます。また、赤丸で囲んだ「拡大縮小」は表示されません。

ただし`dvipdfmx`で生成したPDFは用紙サイズが適切な場合であっても、安全マージンを取るためか96%程度に心持ち縮小印刷されて

しまいます。そこで通常は「PDFを印刷…」 (`⌘+P`) の方を選んで印刷します。こちらの場合には「拡大縮小」のパラメータを手動調整することで、用紙サイズと印刷範囲との調整を行います。



(6) SyncTeX

`UpTeX.app`の内蔵エディタと

PDFビューワは`SyncTeX`に対応しています。画面の`⌘+クリック`で、PDFビューワからはエディタに飛んで当該行を選択表示 (`inverse search`)。エディタからはPDFの当該ページに飛んで表示します (`forward search`)。ただし`forward search`は内部の処理を単純化して実装しているため、当該行が複数ページに跨がっている場合には、その最後のページに飛んでしまうなど精密なものではありません。

4.その他、注意を要する技術的仕様—詳細はソースコードとそのコメント参照—

(1) 初回起動の判定

UpTeX.appでは初回起動であることをUpTeX.app/Contents/Resources/TEX/texmf-local/fonts/opentype/cjk-gs-integrateが存在しないことによって判定しています。このフォルダはcjk-gs-integrate --output=test --link-texmf -cleanup / cjk-gs-integrate-macos --output=test -link-texmfの実行でフォントのシンボリックリンクと一緒に、その格納場所として作成されるものです。UpTeX.appはそれらを削除した状態で提供されて、初回起動時にユーザーのOSバージョン・環境に即してフォントのサーチ・シンボリックリンク作成を行うわけです。このため、もしユーザー自身がcjk-gs-integrateフォルダを自分で削除してしまった場合、再び初回起動時処理が行われてしまうことになります。

5.本パッケージのJMacro部分を構成する内容と諸権利

(1)kuntent2e.sty

大阪大学の金水敏氏 (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kinsui/tex/top.htm>) が作成・公開されているルビ・割注等作成用マクロ。その権利は金水氏に属するものであり、再配布にあたっては金水氏より許諾をいただいております。

(2)uline-.sty

吉永徹美氏が作成された、縦組で利用でき行分割可能な傍線などを引くことができるマクロ。一次配布サイトは閉鎖されてしまいましたが、ソース内のコメントによれば改変しなければ再配布可とのことですので、20180522版から同梱することにしました。

* 拙作の和文縦組用後注作成パッケージ `endnotesj.sty` は、山下弘展 (Acetaminophen) 氏によるv3.0への改良のうへCTAN/TeX Liveに取り込まれ、`collection-langjapanese` の標準配布物に含まれました。また`hiraprop`は`tlcontrib`から取得するように変更しました。

6.免責事項

UpTeX.appは無償で提供されますが、あくまで無保証であり、その導入・使用によって生じ得る如何なる事態に対しても、作成者およびその包含物の一次作成者は一切の責任を負わないものとします。その将来にわたるバージョン・アップやサポートを約束するものでもありません。また再配布や改変物配布についても、それぞれの一次作成者が定める条件に従うこととなります。以上に同意のうへでご利用下さい。

なおUpTeX.appの固有部分は殆どが一般的なサンプルコードやTeXShopのコードなどを参考にしたものであり、特段の独自権利を主張するものではありません。ソースコードも大したものではありませんが、ファイル・サイズの大きいTeX環境を除いたものを同梱しておきます。

7.更新履歴

2025年3月10日

20250307版の内蔵TeXコンポーネンツがTeX Live 2024のままになってしまっていたのを修正した。

2025年3月7日

内蔵TeXコンポーネンツをTeX Live 2025に更新した。また開発環境の変化にともない、10.14 Mojave以降での動作となった。

2024年3月15日

内蔵TeXコンポーネンツをTeX Live 2024に更新した。また開発環境の変化にともない、10.13 High Sierra以降での動作となった。

2023年3月21日

内蔵TeXコンポーネンツをTeX Live 2023に更新した。

2022年4月5日

内蔵TeXコンポーネンツをTeX Live 2022に更新した。

2021年4月3日

内蔵TeXコンポーネンツをTeX Live 2021に更新した。また全てのソースコードをSwiftで書き直した。

(中略)

2018年5月22日

TeX Live 2018にendnotesj.sty (v3.0) が取り込まれたのを踏まえて、独自追加を取りやめ、併せて、パッケージ管理機能とPDFビューワ・コンソールウィンドウを備えた、TeXのための完結した環境としてUpTeX.appを大規模改修した、新版となった。

小川弘和

herogw@kumagaku.ac.jp

dokuroishi@icloud.com

<http://www2.kumagaku.ac.jp/teacher/herogw/index.html>